


 研究  
報告

# 促成栽培イチゴにおける春季以降の ヒラズハナアザミウマに対する4種天敵製剤の 防除効果

静岡県農林技術研究所

 なかの りょうへい かたやま はるき そね りょうすけ  
 中野 亮平・片山 晴喜・曾根 良輔

## はじめに

静岡県では、早生性や連続出蓄性に優れるイチゴ新品種‘きらび香’（2017年品種登録）を用いた長期作型の開発に取り組んでいる。具体的には、8月に定植し、10月から翌年7月まで収穫を継続する超促成栽培の確立を目指している。しかし、本作型では従来の作型と比較して暖候期の栽培期間が長期化するため、害虫被害がより顕著となることが予想される。特に、定植後の秋季および翌年の春季以降はアザミウマ類の飛び込みや増殖が激しくなり、被害果の増大が懸念される。このため、超促成栽培ならびに促成栽培の普及にあたり、新たなアザミウマ類総合防除対策の確立が求められている。

静岡県のイチゴにおいて問題となるアザミウマ類の優占種はヒラズハナアザミウマ（以下、ヒラズ）であり、春季以降に本種による被害が増加することが多い。本種は主にイチゴの花に生息し、花や幼果を加害することで果実の奇形や果実表面にサビ状の褐変を引き起こす。このようなアザミウマ類による果実被害は主に幼虫による食害が原因であると考えられている（春山ら、2013；片山、2005）。本種に対して比較的高い殺虫効果を示す薬剤はいくつか存在するものの（例えば、猪苗代ら、2018）、ハダニ類対策でカブリダニ製剤を導入している場合は有効な選択性薬剤に限られる。また、限られた薬剤に依存することによる薬剤抵抗性発達のリスクも危惧される。

2025年12月現在、野菜類（施設栽培）のアザミウマ類に適用のある天敵製剤は複数存在し、これらをイチゴのアザミウマ類防除に利用可能である。実際、イチゴのアザミウマ類を防除対象として、いくつかの天敵種の利用が検討されている（岩本ら、2019；岩瀬・岡山、2018；

窪田ら、2020；宮田・増田、2004；里見ら、2018；吉澤ら、2015）。しかしながら、各天敵種について個別の評価は行われているものの、これらの防除効果を比較した研究は存在しない。そこで本研究では、イチゴのヒラズ防除に最も有効な天敵種を選抜することを目的に、アザミウマ類による被害が特に問題となる春季以降6月末までの期間において、4種天敵製剤の防除効果と被害果抑制効果を2022～24年の3年間にわたって評価した（中野ら、2025）。

本文に入るに先立ち、アカメガシワクダアザミウマのサンプル品を提供いただいた石原産業株式会社の大朝真喜子氏および石原バイオサイエンス株式会社の山口晃一氏にこの場を借りて御礼申し上げる。

## I 供試した天敵種

本研究で供試した天敵種はリモニカスカブリダニ（以下、リモニカス）、スワルスキーカブリダニ（以下、スワルスキー）、ククメリスカブリダニ（以下、ククメリス）およびアカメガシワクダアザミウマ（以下、アカメ）であり、これらの詳細と放飼密度を表-1に示す。いずれも野菜類（施設栽培）のアザミウマ類に適用があり、ククメリスを除き使用量の最大値に相当する放飼密度を試験に用いた。ククメリスの登録上の使用量は50～100頭/株であるため、イチゴの一般的な植栽株数を7,000株/10aと仮定して、使用量の上限および下限に相当する放飼密度を用いた。いずれの天敵種も市販品を購入し、製剤到着当日あるいは翌日に放飼した。2024年の試験のみ、アカメは石原産業株式会社から提供されたサンプル品を用いた。

## II リモニカスおよびアカメによる 防除効果（2022年）

2022年4～6月にリモニカスとアカメの放飼によるアザミウマ類防除効果を比較した。試験は研究所内の0.4mm目合防虫ネットが展張された土耕パイプハウス

Control Effect of Four Commercial Natural Enemy Species against *Frankliniella intonsa* in Forcing Strawberry Cultivation After the Spring Season. By Ryohei NAKANO, Haruki KATAYAMA and Ryosuke SONE

（キーワード：イチゴ、ヒラズハナアザミウマ、生物的防除）